

「解答例等」・「出題の意図」

研究科・選抜区分・専攻等	2026年度 社会システム研究科（選抜区分：一般選抜外国人留学生特別選抜） 地域コミュニティ専攻（領域・分野・研究科目・選択科目：人間関係学・コミュニティ基礎・専門問題）
出題の意図 （評価のポイント）	1）心理学分野の基礎的な研究成果について学習できているかを確認するための問題である。 2）心理学研究で用いられている概念について、そのメカニズムを含めて理解できているかを確認するための問題である。 3）心理学における古典的で著名な実験の概要について理解できているかを確認するための問題である。 4）～6） 心理学研究の基礎となる研究デザインに関する理論的理解と応用力を評価することと、認知心理学の理論を日常行動や社会的問題と結びつけて理解・説明する力を評価することを目的として出題した。

「解答例等」・「出題の意図」

研究科・選抜区分・専攻等	2026年度 社会システム研究科（選抜区分：一般選抜外国人留学生特別選抜） 地域コミュニティ専攻（領域・分野・研究科目・選択科目：人間関係学・コミュニティ実践・専門問題）
出題の意図 （評価のポイント）	コミュニティ実践専門問題①～③について 1. 問題①～③に共通する意図および評価のポイント 本問題は、社会福祉学を専攻しようとする者にとって必須となる基礎的知識の修得状況を確認するとともに、それらの知識を用いて現代社会の複雑な福祉課題を多角的に分析し、論理的に思考・構成する能力を問うことを意図している。その上で、「制度」「社会関係」「実践理論」の3つの次元から社会福祉を統合的に理解できているか、また現代的な課題に対して自ら研究課題を明確化できる視座を持っているかを問うことも意図している。具体的には、福祉を単なる「個人の救済」ではなく、「地域全体の生活構造」や「社会的な関係性の構築」として捉える視座を評価する。 2. 各問題の具体的な意図と評価のポイント 問題①地域共生社会の概念と実現に向けた取り組み ● 政策動向と理念の理解 ➤ 従来の「属性別・縦割り」の支援体制から、「制度の狭間」や複合的な課題に対応するための「丸ごと・包括的」な支援体制（重層的支援体制整備事業等）へのパラダイムシフトを理解しているかを問う。 ● 住民主体の視点 ➤ 専門職による支援だけでなく、住民一人ひとりが主役となり、「我が事」として地域課題を把握し、支え合いの関係性を再構築するプロセスの重要性を論じられるかを問う。 ● 多機関連携の構想力 ➤ 福祉分野に限定せず、教育、就労、住まい、まちづくりといった他分野との連携・協働を通じた地域づくりの必要性について、自らの考えを述べられるかを評価する。 問題②社会的排除と社会的包摂、貧困・相対的剥奪との違い ● 多次元的な不平等の把握 ➤ 貧困を単なる「所得不足（一次元的）」としてではなく、社会関係の断絶や社会参加の欠如といった「社会的排除（多次元的・動態的プロセス）」として捉える現代的な視角を持っているかを問う。

- 概念の比較分析能力
 - 標準的な生活様式からの欠乏を指す「相対的剥奪」と、そこから排除されるメカニズムである「社会的排除」を明確に区別し、理論的な枠組みとして整理できているかを問う。
- 権利と包摂の視点
 - 社会的包摂を単なる就労支援等に限定せず、シチズンシップ（市民権）の保障や自己決定の尊重を通じた社会参加のあり方として考察できるかを評価する。

問題③ケースワーク理論における診断主義・機能主義・折衷主義

- 援助者と利用者の関係性の検討
 - 「医学モデル（治療者と患者）」に基づく診断主義と、「成長モデル（機関の機能活用）」に基づく機能主義の違いを、専門性と権威性の観点から批判的に検討できるかを問う。
- 理論的変遷の理解
 - 両者の対立がパールマンの「問題解決アプローチ」へと統合され、その後の「生活モデル（エコロジカル・モデル）」へと発展していく歴史的経緯を正確に把握しているかを問う。
- 実践と理論の架橋
 - クライエントの内面理解（心理的側面）と環境への働きかけ（社会的側面）の両義性を理解し、現代のソーシャルワークにおける「状況の中の人」という視点を自身の言葉で説明できるかを評価する。

「解答例等」・「出題の意図」

研究科・選抜区分・専攻等	2026年度 社会システム研究科（選抜区分：一般選抜外国人留学生特別選抜） 地域コミュニティ専攻（領域・分野・研究科目・選択科目：人間関係学・フィールド文化・専門問題）
出題の意図 （評価のポイント）	フィールド文化領域の3つの設問は、いずれも共通して心理学的な概念を社会的な枠組みで論じられるかどうか、もしくはその素養がどれほどあるかを判断することを意図したものである。ゆえに「自己呈示」、「感情」、「承認」といったいっけん心理現象とみなされるものを、社会的関係の中で構築・調整され、その行為が方向づけられる文化的・構造的メカニズムとして論じられているかどうかが大切となる。 例えば、ゴフマンが指摘した「自己呈示」は、人が状況に応じて自分を演出する行為を意味する。ここで重要なのは、自己呈示が単なる“性格”や“意識的な戦略”ではなく、場面ごとの役割期待や周囲との関係によって形づくられる社会的行動であるという点である。人びとは相互行為の秩序を保つために、ふさわしい態度やふるまいを選び、時には集団として協力しながら場を整えていく。 同様に「感情」も、個人の内部で自然に生まれるだけでなく、社会によって方向づけられる。例えばホックシールドが述べた「感情労働」のように、どんな感情を表すべきか、どこまで抑えるべきかは、文化的な感情規則や対人関係の期待によって決まる。怒りや喜びという感情さえ、社会によって学ばれ、調整されている。 また、他者からの「承認」を求める行為も、単なる心理的欲求ではなく、社会に存在する価値観や評価の仕組みに支えられている。承認されやすい基準が限定されれば、個人はその枠の中で自分を理解しようとし、行動の選択も影響を受ける。逆に承認が得られない状況が続けば、疎外感や不安定さを生む可能性もある。 以上のように、「自己呈示」、「感情」、「承認」は、いずれも心理の問題としてではなく、社会的な関係や文化的規範によって形づくられる現象として理解することができる。こうした考え方についてどこまで説明できているかを評価のポイントとした。